くつろぎやすい雰囲気を第一義に考えている。また展示会やミーティング、講演会なども開催できるコミュニティスペースとして運営し、認知の向上と来場者の増加を図っている。事務局員が1～2名連日交代で勤務し、毎週月曜日、第2日曜日および年末年始を除いて、毎日16時から22時まで開場している。

aktaは以下の活動をおこなっている。

・情報提供（予防啓発に関わる情報およびコミュニティ情報）
・啓発資材や啓発プログラムの開発
・資材配布の拠点（資材の作製・梱包・管理・配送・アウトリーチ等）
・HIV/AIDSに関わる人たちの利用（ミーティングや研修など）
・学習の場（ワークショップや講演会など）
・コミュニティスペース（ドロップインスペース、展示スペース、さまざまな打ち合わせやミーティング利用など）

1）来場者の動向

今年度のaktaへの1日平均来場者数の推移は下記のとおりであった。初来場者数は平均すると日に約3～5人で、昨年度に比べて増加傾向にあった（表1）。

2）aktaの利用状況

aktaは様々なミーティングや講演会、展示会などに利用されている。今年度公開としておこなわれた展示会・講演会は、以下のとおりであった（2月以降は現時点では予定）。

・ミュージカル「ヘアスプレー」舞台写真展（4/28～5/3）
・ 大漁鰆展（5/5～17）
・磯山龍朋写真展「レッツゴーラウンドアゲイン」（5/19～31）
・みやぽのぽ（5/24）
・PRHYTHM（6/6）
・ジャンジのワークショップ「ハグハグ」（6/20）
・チンコ展（6/30～7/5）
・性と表現Talk Event（7/4）
・KILL TOY展（7/7～19）
・KILL TOY糞マンparty（7/10）
・ミラン・ビエログルリッチA boundary line絵本展（7/21～26）
・田口弘樹写真展（7/30～8/23）
・PRHYTHM（8/8）
・ジャンジのワークショップ「ハグハグ」（8/15）
・オペラグラフィカPrincess Mermaid展(8/25～9/6)
・犬義展（9/15～27）
・タピオ写真展“asobiba”（9/29～10/10）
・“asobiba”（10/3）
・「写真半分シリーズ・新宿二丁目近辺」展（10/13～11/1）
・tobiji538☆☆☆「RH+」展（11/10～15）
・トークイベント「アノコト」（11/14）
・ミラン・ビエログルリッチ「インプラント」展（11/17～29）
・「できる！」キャンペーンイラスト展（12/1～27）
・PRHYTHM（12/26）
・一の瀬文香写真展（1/5～17）
・一の瀬文香「Seku-Mai」トークイベント（1/9）

（表1）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1日平均来場者数	31.5	31.2	27.1	30.0	36.5	28.0	29.4	29.0	28.0
昨年との差	4.3	0.4	-3.1	1.7	0.5	0.5	-0.2	-3.4	-1.9
初来場者数	112	159	79	125	142	118	104	110	110

・「Untitled」タガワマコト作品展（1/19～31）
・「REACH online 2008」調査結果報告会～ゲイツーリズムの現状を中心に～（1/17）
・“asobiba”（1/23）
・「カラマジ！」展（2/2～13）
・「カラマジ！」パッ・パーティー（2/13）
・風太郎写真展「ふたり、歩いた道。」（2/16～28）
・エイズはじめて物語（第５回）（2/19）
・エイズ予防財団はどう変わるのか？・akta編（2/20）
・風太郎ぷれぜんつ「み境なし：破」（2/27）
・エイズはじめて物語（第６回）（3/13）
・デリ・フェス-DELIVERY BOYS FESTA-（3/21）
・Red String Akira the Hustler 展（3/23～4/4）
・パートナー・シップ（3/28）

また定例的に、韓国語講座、中国語講座、AA（アルコール依存症からの回復）ミーティング、句会などに利用していただいている。

Rainbow Ring 以外のミーティングは、ほとんどが戦略研究のミーティングであり、戦略研究の活動の拠点・前線としても機能している（表２）。

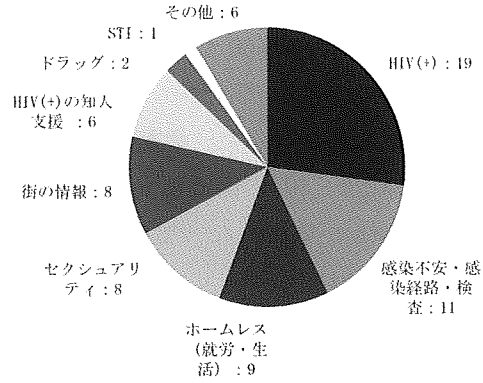
3）相談

来場者から相談があった場合には原則的に、akta にある資材や相談機関を紹介している。

感染不安などについては専門的なカウンセリングができないことを了解の上、傾聴するに留め、誤った知識については適正な情報を提供するように努めている。また、akta の特性上「オープンスペース」という環境での対応になることをご理解いただいている。紹介する資材については検査や病院、性感染症などの情報を充実させている。

今年度は、月に 1～6 件の相談があった。1 月までの相談の内訳は（グラフ 5）のとおりであった。これは一回の相談につき 1 つのテーマで分類しているため、内容が多岐にわたる場合はその主なテーマを示している。今年度の特徴としては、セクシュアリティについての相談の割合が増加した事があげられる。

（グラフ 5）



（表２）

使用内容	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
ミーティング									
Rainbow Ring	12	10	9	8	5	8	7	10	8
Rainbow Ring 以外	16	12	10	11	16	10	10	12	9
研修会・勉強会									
Rainbow Ring	1	1	1	1	1	1	1	1	1
Rainbow Ring 以外	9	9	7	8	8	8	9	10	7
公開イベント・講演会									
Rainbow Ring	1	0	2	0	3	0	0	0	1
Rainbow Ring 以外	1	1	0	1	2	0	1	0	0
展示	1	2	1	3	1	2	1	2	1
取材・見学	3	3	4	5	4	5	5	5	2
相談	6	2	3	5	5	6	2	3	1

4) 資材の梱包・管理・配送・アウトリーチ

首都圏の保健所等の検査機関やHIV診療拠点病院、行政、各商業施設、Rainbow Ringの活動に関わっていただいている個人や団体などに、「マンスリーakta」をはじめ、イベントのフライヤーや、作製した啓発資材を梱包して配送している。毎月約140通の資材の配送をおこなっている。また、アウトリーチするための資材を梱包・準備している。

また、戦略研究とも協力して、戦略研究で作製した資材の管理や仕分け、配送やアウトリーチもおこなっている。今年度はテニスやバレーボールなどの「スポーツ大会」で配布する資材の梱包、「レインボー祭り」での資材の準備とアウトリーチをおこなった。12月の「できる！キャンペーン」ではキャンペーングッズ（卓上カレンダー、カードのセット）の保管、梱包及び配送を行い、13商業施設へのグッズの常設（約2,500セット）と31のクラブイベントでの約3,650セットのグッズのアウトリーチをおこなった。戦略研究で協力いただいている約 40 の保健所への啓発資材の配送も、aktaからおこなっている。

5) マンスリーakta

akta より情報紙「マンスリーakta (akta monthly paper)」を毎月発行している。内容は akta のスケジュールや催し物の情報に加え、コミュニティ情報、医療や検査情報、Rainbow Ringの予防啓発活動の紹介などである。作製にはRainbow Ringスタッフ以外のライターや写真家などにも継続的に関わっていただき、編集会議が定期的に開かれている。記事の執筆や取材においては、コミュニティとの連携を念頭においている。表紙にはいろいろなタイプの顔写真を配し、様々なターゲット層に読まれるように配慮している。

今年度からは裏表紙にバー「タックスノット」のマスターである大塚隆史さんによる「写真半分」を掲載している。また昨年から「Topics!」では、HIVに関連した実用的かつ最新の情報を掲載している（4 月：梅毒、5 月：シンポジウム「小さな人と人の関わりとしてのコミュニティ～ゲイと HIV　昨日・今日・明日」報告、6 月：セックスでうつる病気のまとめ、7月：Tokyo Pride Festival報告、8 月：依存症について、9 月：2008 年エイズ動向報告、10 月：薬物依存症について、11月：世界エイズデー前後検査情報、12月：「できる！」キャンペーン紹介、1 月：ワクチンについて、2 月：もしHIVに感染していたらできるだけ早く検査・医療を受けることが大切な理由、3 月：医療や療養生活のための制度～基礎編)。検査情報では戦略研究で連携できた検査機関を再取材し、写真付きで紹介をしている。

デリヘルなどのアウトリーチ活動、イベント折り込み、店舗での発送商品への折り込み、保健所や医療機関への発送などを通じて配布している。毎月5,000部発行している。

2. デリヘルプロジェクト

新宿2丁目の重要な構成要因であるバーおよびクラブの顧客や従業員を対象とし、コンドームをきっかけとしてAIDS／STIやセーファーセックスを身近に意識してもらうことを目的に、コンドームアウトリーチをおこなっている。もともと自主的にコンドームを無料配布していた新宿2丁目の商業施設による団体「project com.」との協働事業であり、Rainbow Ringが人的提供およびコンドームの作製・提供をしている。

ボランティアスタッフ「デリヘルボーイズ」（delivery health boysの略）により、毎週金曜日に新宿2丁目において、コンドームと啓発資材のアウトリーチをおこなっている。

今年度作製したコンドームパッケージは12種類であった。また、今年度は12月までで30回のアウトリーチおこなわれ、1回あたり1,122～2,529個、平均1595個、のべ47,853個のコンドームを配布した。配布したボラン

ティアは各回6〜18人であった。配布店舗数は1回あたり153〜167軒であった。

デリヘルボーイズは、毎月数名ずつ新人が入ってきており、また同時に活動に参加しなくなる人もいるため、比較的出入りが激しい。アウトリーチをしている際にHIV／STIや予防について、またはRainbow Ringの活動の内容について質問をされることもある。それに対しては、質問集を作るなど、情報を共有するような工夫をしたり、勉強会や交流会を開催して情報の伝達を図っている（デリヘル勉強会については後述）。毎回のデリヘル活動後にはコアスタッフとともに必ずミーティングを行い、活動中における問題点を交換し、コメントを加えている。

3. アダルトデリヘル（Delivery Adult）

都内のハッテン場およびゲイポルノショップ（新宿2丁目を除く）に啓発資材（「マンスリーakta」と「HAVE A NICE SEX」）やフライヤー、また戦略研究で作製した資材をアウトリーチした。

新宿2丁目・大久保・曙橋・赤坂・六本木・新橋・八重洲・上野・秋葉原・浅草・池袋のハッテン場・ゲイポルノショップ（45軒）についてはレンタカーでアウトリーチをおこない、それ以外の遠方のハッテン場（16軒）には配送した。それぞれ、月に1回のペースで配布をおこなった。各店舗には啓発資材用のラックを設置していただいている。1回あたりのレンタカーでの配布数は約900部であった。

今年度は各資材の消化状況を把握すると同時に、ハッテン場のオーナに向けてアンケートをおこない、資材についての顧客の反応、店舗サイドの要望を聞いた。その結果を基に、ハッテン場に有効な資材を検討する予定である。

4. デリヘル勉強会

デリヘルボーイズを中心に、Rainbow Ringの活動に関わり始めたばかりのスタッフに向けた研修会を、デリヘルのアウトリーチが休みの第3金曜日に実施した。各会の内容と参加人数は以下の通り。

- 6月19日：aktaおよびRainbow Ringの活動紹介と予防啓発プログラムの立案とその手法について（佐藤）、ハッテン場へのアプローチの仕方を考える（張）：11人
- 7月17日：HIV感染症の動向と病態と治療について（佐藤）、HIV陽性者の多様性とリアリティを伝える手法としての「Living Together」について（生島）：14人
- 8月21日：性感染症について（佐藤）、自分にとってのSEXの確認とセーファーセックスを考える（荒木）：14人
- 9月18日：ジャンププラスのスタッフと共にHIV感染にまつわる体験を分かち合う（長谷川、髙久）：14人
- 10月16日：デリヘルボーイズインタビューを撮る（エイズ学会に向けてスタッフにインタビューを実施。内容は「プロジェクトに参加したきっかけ」「お店の反応や効果」「参加する中で考えたり気づいたこと、勉強になったこと、自分自身が変化したこと」「活動で気をつけていることや意識していること」など）
- 11月20日：デリヘルボーイズインタビューの上映会と懇親会
- 12月18日：TOKYO FM×Living Together「Think About AIDS」を手伝って鑑賞しよう！
- 1月15日：デリヘルナイト企画会（普段お世話になっているバーのマスターや従業員の方々に感謝の気持ちを込めてaktaに来場して楽しんでもらえるようなイベントを計画）

2月は「エイズはじめて物語に参加して市川先生と交流しよう」、3月は「デリヘルナイ

ト『デリ・フェス-DELIVERY BOYS FESTA-』準備会」を計画している。

5. 講演会

・"REACH Online 2008" 調査結果報告会～ゲイツーリズムの現状を中心に～：日高庸晴、斉藤ヤスキ（日高さんの研究結果を基に、ゲイのツーリズムと HIV 感染の拡大について討論をおこなった）：1 月 17 日：参加者 29 人

・エイズはじめて物語：日本における HIV にまつわる状況や予防啓発活動の流れについて、市川誠一さん、池上千寿子さんを講師にお話を伺う。

・ゲイのパートナー・シップについて：大塚隆史さんを講師にパートナー・シップについてお話を伺う。

6. Living Together 計画

陽性者との共生をテーマに、NPO 法人「ぷれいす東京」が 2003 年から始めたプロジェクトである。現在 Rainbow Ring も協働で進めている。

HIV に対する認識が低いことは、HIV 陽性者がカミングアウトすることが困難である現状において、HIV の問題が存在することにリアリティがないことに起因していると考えられる。また予防とは、陽性者を排除することではなく、誰もが一緒に生きているからこそ誰にでも必要なものである。陽性者やその周囲の人が綴った手記などを通して、ステレオタイプではない多様な陽性者が存在する事に気づき、HIV の問題に対して向き合うことを促すプロジェクトである。

1) Living Together Lounge（音楽とリーディングの夕べ）

クラブイベント会場（ArcH）・DJ・ミュージシャン・朗読出演者とのコラボレーションで実現している（毎月第一日曜日開催）。陽性者やその周囲の人が綴った手記を、ゲイコミュニティの著名人をはじめ、HIV に関わる様々な立場・職種の人々（陽性者や支援者、医療従事者、行政担当者など）が朗読し、その手記を朗読した理由や感想について、自己の体験などをふまえながらコメントをいただく。その合間でライブミュージックやパフォーマンス、DJ の選曲・アレンジした音楽を楽しむイベントである。パフォーマーからも自分自身と HIV 等の関わりについてのコメントをいただいたり、朗読をしていただいたり、場の雰囲気にあった演出を心がけていただいている。毎回 50～120 人の参加があった。出演者が毎回変わることで、毎回初来場者を 10～50 人呼び込むという効果もある。

今年度の参加者数／初参加者数は、4 月 5 日：56 人／16 人、5 月 6 日：72 人／22 人、6 月：69 人／29 人、7 月 5 日：61 人／4 人、8 月 2 日：67 人／17 人、9 月 6 日：90 人／34 人、10 月 4 日：118 人／59 人、11 月 1 日：63 人／26 人、12 月 6 日：78 人／23 人、1 月 3 日：37 人／9 人、2 月 7 日：46 人／17 人であった。

2) Living Together のど自慢

Living Together Lounge がプロや人気のあるミュージシャン・アーチストの出演を楽しむイベントであるのに対して、素人がカラオケを楽しみながら、手記の朗読とそれに対するコメントを述べていくイベントである。希望があれば誰でも参加できる参加型イベントであることと、以前より HIV 啓発活動に場所の提供等のご協力をいただいているバー「九州男」での開催という点からも、重要なプログラムである。

今年度の参加人数は 6 月 28 日（日）：50 人、9 月 27 日（火・祝）：75 人、12 月 20 日（日）：36 人であった。3 月にもう 1 回開催予定である。

7. 医療・検査・行政との連携と情報提供

1) マンスリーakta に、戦略研究で協力関係

にある検査機関を紹介するコーナー「あんしんHIV検査サーチ」を設けた。掲載にあたっては改めて訪問取材し、写真付きで紹介をしている。

2) 東京都の委託事業として以下の活動をおこなった。
・アダルトデリヘル (Delivery Adult)
・講演会「エイズはじめて物語」
・Living Together Lounge
・Living Together のど自慢

3) 東京都「HIV検査ガイド」作製に協力した。これはMSMを対象とした、HIV検査を勧める内容のパンフレットであり、多摩地域検査・相談室と南新宿検査・相談室を紹介している。

4) 新宿保健所のゲイのための検査イベントの広報（実施日：7/16・23、11/5・12）に協力した。今年度はチラシおよびポスターの作製は戦略研究の枠でおこない、配布に協力をした。受検者のうち、チラシを見て来場した人が約4割いた。

5) 新宿区社会福祉協議会や男女共同参画推進センターの職員がaktaに来場し、区内ボランティア団体としての活動の紹介や、セクシュアリティについての問い合わせに対する紹介先として、協力していくことになった。

8. ホームページ

http://www.rainbowring.org/

ホームページを改変中である。主ページはおもにRainbow Ringの活動内容や過去の活動について紹介する内容にして、プロジェクトごとのページで現在進行している内容を随時更新していく予定である。

9. 研究成果発表会（活動報告会）

11月26～28日に名古屋国際会議場で開催された第23回エイズ学会学術集会の展示会場にてブース出展を行い、今までの活動を紹介するパネルの展示と、デリヘルボーイズインタビュー(デリヘル勉強会で前述)の放映、作製してきた資材の展示と配布をおこなった。また「EASY!」パネルの展示もおこなった。

また、3月21日に活動報告会の開催を予定しており、主に新宿2丁目に関わる人や、Rainbow Ringの活動にご協力をいただいている方々にご参加いただいて、意見交換をしたいと考えている。

10. エイズ学会学術集会での発表

第23回エイズ学会学術集会にて、昨年度実施した「デリヘルインタビュー」の分析とデリヘルプロジェクトの意義について木南が、バーサーベイの結果と分析について河邊が、それぞれ口演で発表をした。

11. クラブイベント調査

7月18日に新木場のageHaでおこなわれた「シャングリラ」で800枚、8月10日に新宿2丁目のArcHでおこなわれた「大学生ナイト」で100枚、8月28日に新宿2丁目のArcHでおこなわれた「メンズスーツ」で100枚のアンケート調査を実施した。

12. 冊子「HAVE A NICE SEX」の改訂

「HAVE A NICE SEX」の第2版を発行した。主な改定点は、1) タチのリスクとして考えられるペニスの皮膚の脆弱性について言及、2) ドラッグの影響について言及、3) 巻末のリソースの更新である。また一部のレイアウトや色調を変更して、読みやすく改訂した。配布先は都内の保健所や拠点病院、戦略研究で協力関係にある検査機関であるが、新潟大学や高知市保健所からも要望があり、配送した。

13. PRHYTHM

主にクラブイベントユーザーを akta に呼び込むための、DJユメ企画のイベントを再開した。ゲストDJによる音楽を中心に、バザー

なども併設して開催した。6月6日（土）、8月8日（土）、12月26日（土）におこなわれた。60人～70人の来場者があった。

14. NPO法人化の模索

現在のところ、法人化に向けて実際的な検討はおこなっていないが、情報を集め、情勢を見ながら今年度中に計画を立てる予定である。

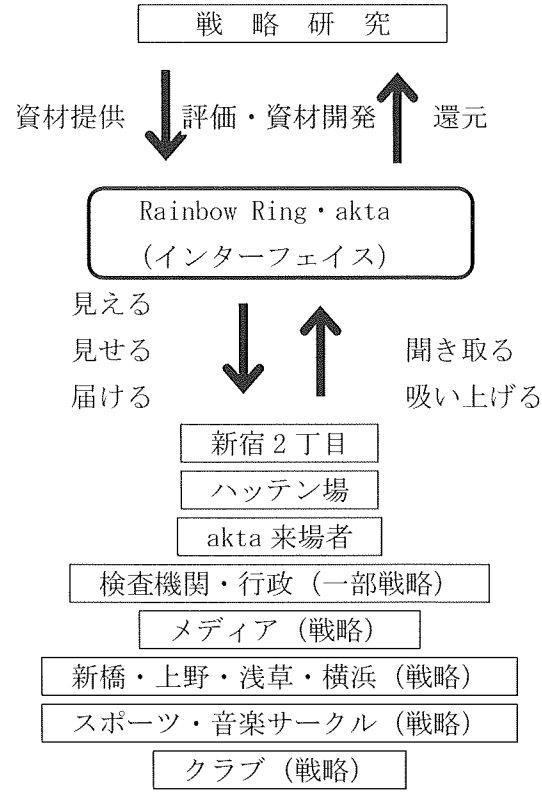
D. 考察

1. HIV予防啓発体制の構築と活動の継続

今年度も、予防啓発の拠点としてのaktaの運営、aktaを中心とした「見える」「見せる」「届ける」活動、より広く効果的な活動を推進するためのネットワーキング、を継続して実施してきた。特に、MSMの多様性に配慮することや、基本となる考え方や態度(Living Togetherのコンセプトなど)をぶれることなく示し続けることに重点を置いてきた。また、戦略研究との関係においての「インターフェイス」としての役割も継続しておこなっている。(図1)

今年度の活動における手応えとしては、地道におこなってきたハッテン場へのアウトリーチ活動が、各ハッテン場の経営者サイドに徐々に認知されつつあることが、アンケートを通じてわかったことが挙げられる。多くのハッテン場において、店舗で直接対応するのがアルバイトの従業員であり、こちらの意向が経営陣に伝わりにくかった。長期にわたり毎月のアウトリーチ活動を続けることで、まず従業員に認知され、そこから経営陣に徐々に認知されてきており、どのような啓発資材が配布されてるのかを目を通していただいたり、それが顧客に手に取りやすい環境を工夫していただいたり、ご意見をいただける状況になりつつある。

（図1）



2. 予防啓発活動を継続するための組織

今年度は昨年度の活動を継続しつつ、その活動や体制を維持するためのスタッフの確保と育成について検討をした。

デリヘルプロジェクトに参加するボランティアスタッフへの勉強会は、以前にも試みたことがあった。その時の主な目的は、活動に参加するにあたって必要な知識や情報の提供（Rainbow Ringやaktaの活動の理念や内容の紹介、HIV/STIについて、セーファーセックスについて、などの講義が中心）や、スタッフ同士の交流であった。今年度は上記に加え、アウトリーチ以外のプログラムに関わる機会を提供したり、他団体と交流する機会を提供した。具体的には、予防啓発プログラムの立案とその手法についての講義の後に自分たちでプランを立ててみる、Living Togetherについてのワークショップ、ジャンププラスのスタッフとの交流会、インタビューに参加したりイベントを企画する、などがあった。また、アウトリーチ活動の後には、コアスタ

ッフが顔を出して話をする機会を増やすようにつとめた。

そもそもアウトリーチ活動の特徴として、コミュニティに出ていくことで、コミュニティの人々とのコミュニケーションがあり、コミュニティの中の様々なシーンを体験できることが挙げられる。よってデリヘルプロジェクトに参加することは、新宿２丁目コミュニティ出始めたばかりの人にとっては、コミュニティデビューの登龍門としての役割があった。しかし、単なる「配布作業」になりがちな毎週のアウトリーチ活動に参加するモチベーション維持のためには、活動に参加することについてさらなる魅力が必要である。今年度試みた新しい企画は、自ら考えて参加する機会を提供することで「知的好奇心」を刺激することによって「自己効力感」を高めたり、業界内で活躍する人々と交流することによる「コミュニケーション欲」を刺激する、などの効果がある。HIV の問題に加え、セクシュアル・マイノリティの問題や、人と人とのコミュニケーションスキルの問題など、様々な事柄について体験をしたり考えたりする機会になっていると思われた。

今年度は毎回のアウトリーチに参加するデリヘルボーイズが、必ず 10 人以上いる状況であった。参加者が多くなったのは、Rainbow Ring が NHK の「ハートでつなごう」のホームページで紹介されたり、新宿区の男女参画推進センターがセクシュアル・マイノリティの相談を akta に持ちかけたりする影響もあった。どのような経緯で我々の活動につながったにせよ、同じコミュニティの中に存在する問題の一つとして HIV の問題に興味を持って活動に参加する人が増えることは、コミュニティ全体の活性化にも寄与し、延いては HIV の問題についてもコミュニティ全体の意識を高めることにつながると思われた。

この経験は、スタッフ育成プログラムとして、今後も活用できるようにマニュアル化する予定である。また、今年度おこなった「デリヘルボーイズインタビュー」では、活動に関わっているスタッフの体験や考え、意識の変化などが語られているので、そのインタビュー内容も今後のスタッフ育成プログラムの作成に活用していく予定である。

今年度からコミュニティセンター事業は（財）エイズ予防財団直轄の事業になり、事務局スタッフの一人が財団の職員として雇用されることとなった。コミュニティセンター事業が永続的に運営できる体制の第一歩として、評価したいと思う。しかし、一人雇用で akta の運営をおこなっていくことは現実的に無理であり、現在流動研究員で雇用されているスタッフ枠の今後の方針について交渉をしていく必要がある。

また、予防啓発プログラムを事業として実施していくために、母体としての Rainbow Ring を法人化することも、組織力を強固にすることにつながると思われるので、具体的な方策を検討していきたい。

E. 結語

当研究が Rainbow Ring と共に築いてきた体制や手法に一定の効果があることがわかり、特にアウトリーチにおいてアプローチが困難であったハッテン場にも徐々に活動が浸透していることがわかった。また、活動を継続していくための体制づくりとして、スタッフの育成プログラムを実施した。今後はプログラムのマニュアル化に加え、法人化も考慮して体制を作っていきたい。

F. 発表論文等

（国内学会発表）

1) 木南拓也、張由紀夫、荒木順子、河邊宗知、柴田恵、佐藤未光、木村博和、市川誠一：新宿２丁目における予防啓発プログラムの効果の検討：その１～デリヘルインタビューから～，第 23 回日本エイズ学会学術

集会，2009 年 11 月 26 日，名古屋.
2) 河邊宗知、張由紀夫、荒木順子、木南拓也、柴田恵、佐藤未光、木村博和、市川誠一：新宿２丁目における予防啓発プログラムの効果の検討：その２～バーアンケート調査から～，第 23 回日本エイズ学会学術集会，2009 年 11 月 26 日，名古屋.

厚生労働科学研究費補助金　エイズ対策研究事業
男性同性間のHIV感染対策とその介入効果に関する研究

名古屋地域における男性同性間のHIV感染予防介入研究

研究分担者：内海　眞（国立病院機構東名古屋病院・名古屋医療センター）
研究協力者：石田敏彦、藤浦裕二（ANGEL LIFE NAGOYA）、菊地恵美子（国立病院機構名古屋医療センター／財団法人エイズ予防財団）

研究要旨

男性同性間のHIV感染は、日本全体でもまた名古屋地域においても依然として多い。名古屋地域のMSM（Men who have Sex with Men）を対象にしたHIV感染予防対策の立案・実施・評価は極めて重要な継続的研究課題である。この分担研究は名古屋市に拠点を置くALN（ANGEL LIFE NAGOYA）と名付けられたCBO(Community Based Organization)との協働で行われた。本報告では、2009年度の１）予防活動の実際とその成果、２)、評価並びに問題点の抽出、３）今後の方向性について記述する。

１）実際の予防活動とその成果は以下のとおりである。①ゲイコミュニティに対するコンドームとフリーペーパーの配布（前者は1468.5個／月、後者は385冊／月)、②啓発拠点「rise」の運営(来場者は158.1名／月)、③予防啓発イベント「NLGR(Nagoya Lesbian and Gay Revolution)」の開催(来場者は2日間で延べ4000名)、④MSMを対象にした無料HIV検査会の実施(2回実施、受検者合計180名、HIV陽性者6名[3.3%])。

２）2001年の検査会に比較し検査会への参加者数は年々増加し、コンドーム常用率も2001年の調査結果と比較し近年は飛躍的に上昇している。また、riseへの訪問者数も漸増している。つまり、ALNの発信するHIV関連情報が届く範囲は拡大し、行動変容もある程度認められた。しかし、名古屋医療センターにおける新規HIV陽性者数は依然として減少傾向にはない。しかも、年齢の上昇とともに診断時にすでにAIDSを発症している割合が高い。以上より、現在の予防活動はそれなりの成果を挙げてはきたが、決して十分ではないと結論付けられる。現在の活動に対する問題点の抽出を目的に、名古屋医療センターのMSM／HIV陽性者に予防活動に関する面接調査を実施したところ、以下のような提案がなされた。一般社会に生きるMSMにとって、MSM向けに特化して発信された情報には積極的に近づきにくい状況があるので、一般向け情報の中にMSM向け情報を潜ませる形で発信をしてほしい。

３）上記結論に基づく今後の方向性は以下の通り。①予防啓発活動の拡大（未だ協力関係を構築していない商業施設との関係樹立)、②高年齢層が集まる名古屋駅西の商業施設へのアプローチ、③高年齢層のHIV陽性者を対象とした面接調査（今何が予防活動に欠けているか)、④MSM向け情報を忍ばせた一般向けHIV関連情報の発信、⑤上記活動を推進するためのスタッフの獲得と他団体との協働関係の樹立(特にHIV陽性者団体)、⑥これまでの予防活動のマニュアルの作成。

A. 研究目的

わが国におけるHIV感染は未だ多く、名古屋地域においても同様である。特にMSMの間の感染はわが国のHIV感染の大半を占め、その予防は重要かつ喫緊の課題である。

本研究事業は、まずMSMに対する予防啓発活動を立案・実施し、その成果を検討するとともに、現存する問題点を抽出する。次いで、問題点の解決に向けて必要な対策を立案し、次年度の予防活動に繋げる。この方式を繰り返し、最終的にMSM間のHIV感染に対する有効な予防対策を構築することを目的とする。

B. 研究方法

まず以下の予防啓発活動を実施した。すなわち、①ゲイコミュニティへのアウトリーチ（コンドームと情報誌[フリーペーパー]の配布）、②啓発拠点の運営、③啓発イベントの開催、④無料HIV検査会の開催、の4活動である。

次いで、これらの活動がどのような成果と予防効果をもたらしたかを検討した。予防効果の判定に当たっては、①啓発情報が届く範囲の増大度を測る量的判定、②情報が予防行動につながったかどうかを測る質的判定、③実際の新規HIV陽性者の発生頻度による疫学的判定、の3つで評価した。③については名古屋医療センターのHIV陽性者動向によって評価した。

なお、今年度は名古屋医療センターの32名のHIV陽性MSMに対し、現在の予防活動の問題点や課題をHIV陽性者の視点から探ることなどを目的に、半構造的インタビューを実施した。面接での質問項目は、①感染告知時の気持ち、②感染告知前のHIV感染症に関する知識、③セクシュアリティについて，④ALNについて知っていること、⑤ALNが発信する情報を含むHIV関連情報の入手量、⑥商業施設の利用度、⑦コンドーム使用、⑧HIV感染症に関する知識と行動の一致度、⑨パートナー関係、⑩現在のHIV抗体検査の問題点、⑪現行の予防啓発活動の問題点、⑫より望ましい予防啓発のあり方、の12項目である。今回は予防啓発活動に関するインタビュー項目を検討した。インタビュー内容はテープに録音し、それを文字に変換したのち、テープ記録は消去した。

今年度の予防啓発活動の成果と予防効果の検討、並びにHIV陽性MSMへの面接調査から浮かび上がった問題点を検討し、次年度の予防対策に必要な課題を考察した。

C. 研究結果

1）予防活動とその実績

①ゲイコミュニティへのアウトリーチ

名古屋地区のMSM向け商業施設は、女子大小路、伏見、名駅近辺の3地域に集中している。2010年1月現在、それぞれの地域においてALNと協力関係にある商業施設は表1の通りである。協力関係にある施設に毎月コンドームと情報誌「h.a.n.a.」を配布した。

バーやショップにはコンドーム20個/月、ハッテン施設には1軒当たり500個/月配布した。バー・ショップが合計41軒、ハッテン施設が2軒であるから、掛け算をすると月に1820個用意することになる。無料コンドームのパッケージデザインは3通りである。バーにおいては必ずしも毎月20個確実に消費されるわけではなく、消費率（お持ち帰り率）は平均すると58.6%であった。最近4年間のバーにおけるコンドーム消費量を表2に示す。

なお、情報誌「h.a.n.a.」はほぼ毎月発行されている。

②啓発拠点の運営

啓発拠点のriseを週4日オープンしてきた。運営はALNが担当し、木・金曜日は午後8時から11時、土曜日は午後4時から10時、日曜日は午後2時から8時まで開場している。

表１　ALNの協力商業施設

地区	施設	
女子大小路	バー　34／36店 協力率94% ショップ　1／４店 協力率25% ハッテン施設0／ ２店 協力率0% クラブイベント5／5件 協力率100%	観光バーと連携が取れていない。MIXバーと連携が取れている。 昨年 10 月にオープンした店と協力体制にある。 2 店舗ともマンション系である。コンドームは置いてあるようである。 昨年より、外国人向けのクラブイベント１件が協力体制になった。
伏見	バー　2／10店 協力率20%	客層は30代後半～50代を対象としている。 協力体制にないバーの客層も同じである。
名駅近辺	バー　4／10店 協力率40% ハッテン施設　2／3店 協力率67%	客層は30代後半～50代を対象とした店舗が多数を占める。 ２店舗とも旅館型。連携が取れていない施設は客層が高年齢層である。

表２　最近４年間のコンドームアウトリーチ

	18年度	19年度	20年度	21年度
4月	６５３	４８９	５０７	４８７
5月	６０３	４１６	４６５	５９３
7月	５９４	５２４	５３５	４０４
8月	７３５	４４６	４７８	４４４
9月	６４７	４２９	４６２	５０５
10月	５６３	４７５	４６０	４２２
11月	６６１	４３８	４５３	４７０
12月	６０６	３８５	４３０	４２３
年度合計	５０５５	３６０２	３７９０	３７４８

なお、riseにおいてはHIV/STD勉強会を始め手話教室などの会合を開催している。その内容を表３に示す。最近 3 年間の来場者数を表 4 に示した。

初来場者へのアンケート調査によれば、来場の主なきっかけは前年度までは友人に誘われた来場者が６割、ネットが１割、掲示されたポスターや情報誌を見て来た人が１割を占めた。しかし、21年度は友人に誘われて来た来場者４割まで減少し、ネットを調べて来場した人の割合が２割まで高くなった。その来場者は自己の感染不安を抱いて情報を求めてきたのが主たる理由であった。最近２年間の初来場者数を表５に示す。

表３　平成２１年度のイベント

イベント	頻度	
JOINT（勉強会）	月１回	毎月第３土曜日
ソーシャルスキルトレーニング（コミュニケーション）	月１回	毎月第４土曜日
手話教室	月３回	毎月第１土曜日 第２・４日曜日
中国語教室	月１回	毎月２土曜日
僕らのゲイライフプロジェクト（ワークショップ）	月１回	毎月２土曜日
万華鏡教室	年数回	不定期

表４　最近３年の rise の来場者数

	19 年度	20 年度	21 年度
４月	79	120	177
５月	113	112	182
６月	108	106	83
７月	133	143	165
８月	109	73	166
９月	129	162	217
10 月	117	187	117
11 月	155	184	182
12 月	134	160	134
年度合計	1211	1247	1423
月平均	134.6	138.5	158.1

表５　予防活動の成果と予防効果表５　最近２年の rise の初来場者数

	４	５	６	７	８	９	１０	１１	１２	合計
平成 20 年度	1	2	14	1	3	8	2	6	9	55
平成 21 年	9	10	10	7	7	4	3	5	1	56

表6

受検者数・陽性者推移　2001～2009年

	受検者数	HIV陽性者数	
2001年	148名	4名	2.7%
2002年	304名	7名	2.3%
2003年	346名	4名	1.2%
2004年	439名	12名	2.7%
2005年	425名	9名	2.1%
2006年	471名	21名（＊1名）	4.5%(4.0%)
2007年	538名	12名	2.2%
2008年(6月)	439名	8名	1.8%
2008年(12月)	92名	5名（＊1名）	5.4%(4.3%)
2009年(9月)	107名	5名	4.7%
2009年(12月)	73名	1名	1.4%

（　）内はすでにHIV陽性を診断された人数並びにその人を除いた新規陽性者の割合

③啓発イベントの開催

NLGR2009においても従来と同じ形式を実施する予定であったが、新型インフルエンザの流行に備えて無料HIV検査会だけ延期とした。

予防啓発イベントの部分は従来と同じ形式を採用した。今回はHIV陽性者への理解と共生をイベントの一つの目的に掲げた。名古屋医療センターのHIV陽性者の方々の協力を得て陽性者メッセージをブース展示したところ、多数の人々が来場した。検査会は延期されたが、イベント来場者は例年通り2000人/日を超えた。また、メイン会場で実施したアンケート調査は、今回からパソコン入力方式に変更した。結果の詳細は新ヶ江氏の報告を参照されたい。

④無料HIV検査会の開催

2回の検査会を開催した。一つは毎年NLGRと同時開催している検査会が延期となったために後日行われた検査会であり、もう一つは年末に実施されるM検である。前者は9月の第2土日に、後者は12月の第1土日にともに千種保健所を会場として実施した。前日に同意を取り採血し、翌日に確定検査を含めた結果を通知する。検査項目は、HIV検査に加えB・C型肝炎ウイルス検査と梅毒検査（RPR）であった。これまでの無料HIV検査会の成績を表6に示す。なお、2009年に行われた2回の検査会でHBsAg陽性と診断された人数は2名、抗HCV抗体陽性と診断された人数は0名、RPR陽性は12名であった。

2）予防活動の効果判定

ALNとともに行ってきたHIV予防活動の効果を判定した。判定方法は、①啓発情報が届く範囲の増大度を測る量的判定、②情報が予防行動につながったかどうかを測る質的判定、③実際の新規HIV陽性者の発生頻度による疫学的判定の3段階で行った。具体的には①はNLGRの無料検査会に参加した人数の推移、②はコンドーム使用率の推移、③は名古屋医療センターにおける新規HIV陽性MSMの推移並びに初診時のCD4値の推移を評価することに

よって行った。表6に示されるように、無料HIV 検査会への参加者は年々増加しており（2008 年度は前年の検査会があまりにも混雑したため、検査会の広報範囲を狭めたためやや減少)、ALN の情報が届く範囲は拡大していると考えられた。コンドーム使用率を 2001 年度のデータと 2008 年度のデータを比較した結果、確実に使用率は向上していることが判明した（図１)。しかし、名古屋医療センターにおける MSM の新規 HIV 陽性者は減少しておらず、AIDS 患者の割合も高い。初診時 CD4 値も改善が認められてはいない（表７)。

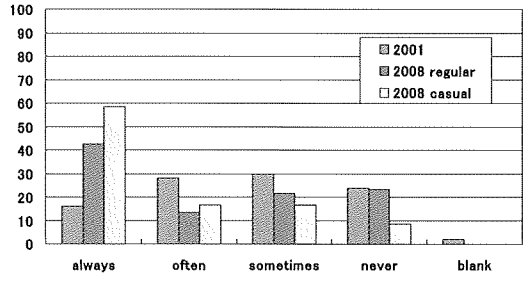


図１　コンドーム使用率の変化

表７　新規 MSM 患者動向

	新規人数	エイズ発症%	初診時CD4 値平均	初診時CD4 値中央
2003	52	30.8	256.4	246.0
2004	63	28.6	268.0	266.0
2005	68	26.5	282.5	313.0
2006	83	30.1	232.1	215.5
2007	108	26.9	252.0	248.0
2008	95	38.8	231.8	204.0
2009	99	43.4	260.0	248.0

特にこの２年間は初診時にAIDSを発症している人の割合が高い。初診時 AIDS を発症している割合は年齢が高くなるほど顕著である。40 代以降の AIDS 発症率は 50%を超え、60 代に至っては 100%であった。

３)名古屋医療センターの MSM／HIV 陽性者に対する聞き取り調査

我々の活動が最終的には未だ十分な予防効果を挙げていないことが明らかとなったが、その原因を探るために、名古屋医療センターの HIV 陽性 MSM 患者さん 32 名に、現在の HIV 予防活動の問題点や課題を聞きとる調査を実施した。その結果、以下の点が明らかになった。

① 知識と行動は一致しない（32 名中 14 名[44%]が十分な知識を有しながらリスクのある性行動を実施していた。)

② ALN の名前も知らない人々が 32 名中 14 名[44%]存在した。名前だけ知っている人が８名おり、情報入手などを行っている人は 10 名に限られていた[31%]。

③ MSM に特化した情報はかえって敬遠される、と答えた人が 24 名[75%]に及んだ。

④ HIV 陽性者の現実生活を認識すべき、と答えた人が 12 名[38%]存在した。

⑤ 正確な医療情報の提供が必要、と 100%の人が答えた。

D. 考察

我々と ALN は 2001 年から、①コンドーム配布を含む HIV 情報の発信、②啓発拠点の運営、③予防啓発イベントの開催、④MSM を対象にした無料 HIV 検査会開催、などの予防啓発活動を継続してきた。こうした活動は無料 HIV 検査会に参加する人の増加、コンドーム使用率の改善という成果をもたらした。しかし、新規 HIV 陽性者の減少という形では実を結んではいない。しかも、この２年間は初診時エイズを発症している人が増加している。エイズ発症の増加とは、検査を受けていない人々が存在することの反映であって、我々の予防活動の不十分さを物語っている。

我々は現状に甘んじているわけにはいかな

い。では、現在の活動に何を付け加えなければならないか。これを以下で考察したい。

まず活動の範囲を拡大する必要がある。表1に示したように、商業施設の中でもまだ協力関係を樹立していない施設が多数存在する。ALN の認知率は聞き取り調査でも判明したように決して高いわけではない。少しでも認知率を上昇させる必要がある。ALN の守備範囲であるので彼らの一層の努力が求められている。

初診時にすでに AIDS を発症している MSM がこの2年間急増している。初診時 AIDS を発症している人は中高年者に多い。特に60代以上は100%初診時に AIDS を発症していた。このことは中高年層の MSM の人たちには十分な HIV 関連情報が伝わっておらず、従って検査にも行くことができない状況が存在することを示している。現在 ALN とは別のグループと協働して、名古屋駅西にある商業施設にアプローチを開始した。その地区は 50 代以上の人々が集まる地域で、ALN が対象としている比較的若い集団とは属性を異にする。現在検査の宣伝を行っているが、成果は今のところ認められない。新たな方式を模索しているところである。次年度の課題としたい。

中高年層の MSM に対してどのようなアプローチが適切なのかについては、名古屋医療センターの同年齢の MSM・HIV 陽性者から示唆を得たい。これも次年度の課題としたい。

名古屋医療センターの聞き取り調査において、MSM に特化した HIV 関連情報は敬遠される傾向を認めた。MSM ではない人々と仕事を共にしている MSM にとっては、MSM に特化した情報にアプローチすることは困難を伴うだろうことは十分理解される。さらに、HIV 感染症は MSM に特化した疾患でもない。従ってもっと一般的な形で HIV 関連情報を提供すべきと考える人々が多かった。MSM の人たちが HIV 関連情報をもっと一般的な形で入手しやすい環境を整えることも、MSM に対する予防活動の一つのあり方と思われる。MSM への特化ということが我々の活動の前提となっているように思われるが、別の視点からの予防啓発活動も併存して良いだろう。

やらねばならぬことは山積しているが、残念なことに ALN のコアスタッフの数が少ない。しかも彼らは日中自分自身の仕事に就いている。空いている時間を ALN の活動に費やしているので大変な苦労と言わねばならない。

しかし、一方では予防啓発活動をさらに前進させなければならない。スタッフの獲得が喫緊の課題であるが、もう一つの解決策は、ALN とともに予防啓発活動を行う他のグループと協働することである。我々は公的資金を基礎にして予防啓発活動を実施している。この資金は我々の独占物ではない。予防啓発という目的に沿って活用され、且つ成果を上げることが求められている。この期待に応えるためには、多くの人々との協働が我々に課せられた義務と考える。研究代表者がこの点に関してはリーダーシップを取り、公的な期待に添うよう活動の幅を広げていかねばならないと考えている。

幸い、この地に HIV 陽性者のサポート団体である「Life 東海」が発足し、数名のコアスタッフとともに約 30 名のメンバーを擁するグループに成長した。彼らの力も借りたいと念願している。彼らこそ HIV 感染がもたらすものを熟知している。彼らの思いを予防活動に生かすことが、これからの予防活動の質を高めることにつながると信じている。

E. 結語

我々は ALN と協働して、コンドーム配布を含む HIV 関連情報の発信、啓発拠点の rise の運営、予防啓発イベントである NLGR の開催、無料 HIV 検査会の開催、を行ってきた。これらの活動は 2000 年から準備・実施されてきており、検査会への参加者の増大とコンドーム使用率の向上という一定の成果を上げてきた。

しかし、新規HIV陽性者の減少という形では実を結んではいない。

この問題の解決に当たっては、活動の範囲の拡大、特に中高年齢層への情報発信、それを支えるスタッフの養成、他のグループとの協働、などが必要である。また、HIV 陽性者の聞き取り調査から判明したように、一般向けHIV関連情報の中にMSM向けの情報を偲ばせるという工夫も重要と考えられる。

F. 発表論文

（研究論文）

1) 新ヶ江章友、金子典代、内海眞、市川誠一：HIV抗体検査会に参加した東海在住MSMの性自認とHIV感染リスク行動，日本エイズ学会誌 11(3)，255-262，2009.

（国内学会発表）

1) 重見麗、服部純子、保坂真澄、伊部史朗、藤崎純一郎、横幕能行、浜口元洋、内海眞、岩谷靖雅、杉浦亙：BEDアッセイを用いた名古屋医療センターにおける新規HIV感染者の動向調査，日本エイズ学会学術集会総会，2009年11月，名古屋.
2) 藤崎誠一郎、横幕能行、服部純子、伊部史朗、内海眞、浜口元洋、岩谷靖雅、杉浦亙：HIV／HBV重複感染者におけるHBVgenotype解析および薬剤耐性アミノ酸変異の検出，日本エイズ学会学術集会総会，2009年11月，名古屋.
3) 伊部史朗、横幕能行、椎野貞一朗、田中理恵、服部純子、藤崎誠一郎、岩谷靖雅、間宮均人、内海眞、加藤真吾、杉浦亙：日本におけるHIV－２感染症の分子疫学的解析，日本エイズ学会学術集会総会，2009年11月，名古屋.
4) 菊地恵美子、内海眞、浜口元洋：名古屋医療センターにおけるMSM患者の視点から予防啓発活動の問題点を探る，日本エイズ学会学術集会総会，2009年11月，名古屋.

（国際学会発表）

1) Shingae A, Utsumi M, Ichikawa S, et al.:Differences between Two Samples of MSM Attending HIV Testing Events in Nagoya, Japan, 9th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific, August 2009, Bali, Indonesia.

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
男性同性間のHIV感染対策とその介入効果に関する研究

大阪地域における男性同性間のHIV感染予防介入研究

研究分担者：鬼塚哲郎（MASH大阪／京都産業大学）
研究協力者：山田創平（MASH大阪／京都精華大学）、辻宏幸、後藤大輔（MASH大阪／財団法人エイズ予防財団）、内田優、町登志雄、中村祐子、鍵田いずみ、原澤俊也、祝雄一、大畑泰次郎（MASH大阪）、木村博和（横浜市健康福祉局）、金子典代、大森佐知子（名古屋市立大学看護学部）、コーナ・ジェーン、塩野徳史（名古屋市立大学看護学部／財団法人エイズ予防財団）、日高庸晴（関西看護医療大学）、市川誠一（名古屋市立大学看護学部）

研究要旨

平成21年度、MASH大阪は以下のような研究事業を実施した：

1．以下の介入プログラムを執行した：

1）コミュニティレベルのプログラムとして、月刊のコミュニティペーパー＜SaL+＞の発行を継続して行った。本年度より編集方針を転換し、これまでのエイズ予防/セクシュアルヘルス関連情報をコミュニティ情報でくるんで提示する方式を止め、エイズ予防/セクシュアルヘルス関連情報を前面に押し出す方式を採用した。平成21年4月～22年1月の期間に、月平均186店舗および38団体に21名のボランティアが6600部を配布した。

2）グループ・個人レベルのプログラムとして：①ドロップインセンター＜dista＞関連事業を執行した。平成21年4月～22年2月の期間に、月平均822名が来場、うち初来場者は月平均83.7名、期間全体で921名であった。いずれも前年比で微増。16種のカフェイベント、5種の教室、4種の展覧会が開催され、相談件数は225件であった。スタッフ研修プログラムが大幅に充実し、6月以降毎月開催、参加者は6～17名であった。②STI勉強会＜Café Chat＞を執行した。毎月趣向を変え、工夫を凝らして開催し、参加者は6名～54名であった。③若年層ネットワーク構築支援プログラム＜Step＞を4月、6月、7月、8月に開催、総計117名が参加、うち99名がドロップインセンター＜dista＞を利用した。④ハッテン場におけるセーファーセックス促進環境整備プログラム＜ハッテン場プロジェクト～β～＞（商業系ハッテン場等でのコンドーム普及100％作戦）を執行した。前年度に19の商業施設を対象に実施した予備調査の結果をふまえ、本年度は15の施設に対し総計58,800パックの啓発資材（コンドーム、ローション、啓発情報）を短期間に集中して配布した。

2．上記介入プログラムの効果評価ツールとして、平成19年度に引き続きゲイバー顧客層を対象とした質問紙調査（バー精密調査）を実施した（別稿参照）。

3．大阪府エイズ対策基本方針の改訂作業に協力した（大阪府健康医療部保健医療室地域保健感染症課との協働）。

A. 研究目的

本研究の目的は、平成21年度に執行された研究事業を記述・分析し、効果評価と照合することで、個別施策層向け予防介入事業のモ

デル構築を試みるところにある。

B. 研究対象と方法

本研究の対象は平成21年度（2009年度）にMASH大阪によって執行された予防介入プログラムであり、後述する効果評価の結果と比較検討したうえで考察を加える。比較検討、考察にあたっては、疫学とその周辺領域のみならず、組織論、ソーシャルマーケティング理論、社会学といった広い領域からの言及を行うこととする。

C. 研究結果

各プログラムの執行状況について順次報告する。

①コミュニティペーパー＜SaL+＞の配布

（これまでの流れ）

2000ー2002年度に開催された臨時検査イベントSWITCHを通して得られた情報をコミュニティに還元するためのツールとして構想された＜SaL+＞は、2003年度に入りコミュニティペーパー的性格を強めながらコミュニティに浸透してゆき、2004年度実施したフォローアップ調査の結果、関連知識、受検行動、予防行動のいずれにおいても、受取り群には非受取り群と比較して有意な効果がもたらされたことが示唆された。

（目的）

- MASH大阪が把握している情報をコミュニティに還元する。
- 配布活動を通じて、コミュニティとのネットワークを構築する。
- 地域に密着した情報を発信し共有化をはかることで、コミュニティへの帰属意識を涵養する。

（成果）

今年度の配布実績は（12月末までの時点で）毎月平均186店舗と38団体に20名のボランティアスタッフが約6700部を配布した（9月はPLuS+の広報とあわせて行ったので除外している）。9月はPLuS+にあわせて1000部増刷した【付表1】。

年間を通して発行部数のほとんどは、ゲイタウンや地域団体への配布であるが、夏ー秋にかけては大型のイベント会場等でも配布した。

今年度も配布枚数・活動は順調に推移しコミュニティペーパーとして確実に地域に定着したことをうけ、「コミュニティ関連情報」よりも「セクシュアルヘルス関連情報」を前面に打ち出す方向転換を行った。具体的には、１）特集記事において、エンタテイメント性を保ちつつエイズ予防/セクシュアルヘルス関連のテーマを取り上げた、２）医師、MSW、検査技師等、専門職者のインタビュー記事を掲載した、の２点である。

②ドロップインセンター＜dista＞

（目的）

大阪地域のゲイ男性が利用する商業施設が多い地域に啓発普及の活動拠点を整備・運営し、HIV/STI感染予防に向けた啓発プログラムを戦略的に展開することを事業の目的とする。ドロップインセンターの機能は以下のとおり。

○予防啓発事業の拠点機能として

- 啓発活動およびアウトリーチのベース基地（啓発の実施・普及機能）
- 予防啓発に関わるスキル研修会・講習会会場（人材育成機能）
- セーファーセックス勉強会やワークショップ会場（啓発普及機能）

○情報センター機能として

- コミュニティの人がふらっと自由に立ち寄れて、セクシュアルヘルスに必要な情報やコミュニティの情報を持ち帰ることができる（情報の還元・普及機能）
- 相談場所・窓口（相談機能）

○コミュニティセンター機能として

・コミュニティ交流プログラム会場（地域交流機能）

・コミュニティからのリアクションをフィードバックさせる（情報収集機能）

・リピーターを獲得し、その人達と相互に確実な情報伝達をくりかえすことによって、コミュニティ内のキーパーソンの育成をはかる。

（対象クライアント）

対象クライアントとして以下を想定した。

1. ゲイ関連施設従業員
2. ゲイ関連施設利用者
3. インターネット利用者
4. エイズ対策関連団体／個人

（成果目標）

成果目標として以下を想定した。

・当事者性を重視した予防啓発活動を、コミュニティの中心エリアで実施し、コミュニティメンバーや関係機関との連携・協働により、セクシュアルヘルスの増進、セーファーセックスへの環境づくりを目指す。

・＜dista＞を核としたコミュニティ・ネットワークを構築し、そのネットワークを通じてHIV/STIの予防や共生のメッセージと正しい情報が伝わってゆくことを目指す。

・情報と空間・時間を共有し、HIVを身近に感じる人が増えていくことで、HIV/AIDSの予防と共生の意識がコミュニティ全体に広がり、行動変容を促すことを目指す。

（運営体制）

2009年度は基本オープン時間を水曜日～月曜日の17時ー23時とし、火曜日を休館日とした。土曜日には不定期でイベントを開催しその際はオープン時間を17時ー5時とした。17時ー20時をAシフト、2時ー23時をBシフト、及びイベント開催時の土曜日の23時ー5時をCシフトとして、運営スタッフとコンシェルジュ（ボランティア・スタッフ）がシフトを組んで＜dista＞運営業務に当たった。コンシェルジュは現在10名が稼働している。

今年度は、より相談機能の強化をめざし、毎月第２日曜日に運営スタッフとボランティアスタッフを対象とした研修を行った。

（成果）

土曜のイベント実施を若干減らしたため施設オープン時間は月平均 184 時間に減少した。しかし来場者数は月平均 820 名程度あり、前年度よりやや増加した。そのうち初来場者についても、月平均 84 名程度あり、これについても前年度より増加した。初来場者数は全体の約 1 割であった。＜dista＞利用状況及び利用者数年度別推移は【付表 2】【付表 3】のとおり。

今年度に開催したカフェイベントと教室の実施内容および展覧会内容は【付表4】【付表5】のとおり。

相談件数は月平均 22 件程度あった。その推移と相談内容は【付表 6】及び【付表 7】とのとおり。

また相談体制の強化をめざし、「コミュニティセンターにおける対人支援」について理解し、利用者に適切な支援をするために必要な基礎知識と技術を習得することを目的としたスタッフ研修プログラムを月1回実施した。実施内容は【付表8】のとおり。これにより相談を受けた際のリソース先がより明確に共有された。

またふらっと来た来場者のうち特に初来場者については、コンシェルジュが積極的にコミュニケーションをとる方針を徹底させたことにより、予防や検査情報を確実に提供できるようになった。

③STI勉強会

（目的）

CAFÉ CHATとはエロネタや恋愛ネタを中